●9月選評

小島なお

・杢いう子（佐賀県）

透けるほどスライス輪郭が残暑

いくら薄くスライスしても玉ねぎが消えることはない。季節もまた終わりに近づきつつも消えることなく残暑の輪郭を持ち、向こう側に秋を透かしている。

・岡村　奏汰（茨城県）

いつまでも
ささやかなままの君のため
NGワードを用意している

ささやかな君は言葉でさらに自分をささやかにしてしまう。これだけは口にしていけないとNGワードを用事することで、ささやか化に歯止めをかける。

・ムクロジ（群馬県）

京言葉に慣れて唐辛子のへこみ

独特の節と含みのある京言葉。新しい土地がようやく口に馴染んできた頃合いと、万願寺唐辛子のしなやかなカーブとが調和する。甘みと辛みの異文化。

・檜野　美果子（宮城県）

桃熟れる
delete キーを押すたびに

delete キーを押すと文字やファイルは削除され、なかったことになる。けれど、時間そのものを元に戻すことはできない。桃の歳月はアナログに前進してゆく。

・平松　泥沸（兵庫県）

ダビデ像その内側の管理人

人間の力強さと美しさの象徴であるダビデ像。しかし時代とともに価値観は変化する。内側の管理人はその強さと美が古びないようメンテナンスをしている。

・木下　香苗（滋賀県）

届いたよ
やけにゆっくりした矢文

相手に正体を明かしたくないとき、威嚇の意味を込めるとき。やけにゆっくりした矢文にはどちらでもない呑気さがある。してみたかった、の矢文かも。

・波野　梅雨（東京都）

ああそうだねの平原に殴られた

同意とも諦めとも取れる「ああそうだね」の懐深い無味には、広大な土地がひろがっている。なにをどんなに訴えてもこの返事が来たら負けるしかないような。

・堀内　佑（東京都）

前髪を五線譜にして肉を噛む

等間隔に真っ直ぐに下ろした前髪の五線譜。夢中で肉を噛むとき、額の楽譜にはどのような音楽が奏でられているのか。数小節のとても短い音楽。

・ハバカリ タケヂ（神奈川県）

うまれおちたその瞬間から
あたしのなかのテレビ局
白鳥の湖

うまれおちた瞬間から心のテレビ局は白鳥の湖しか流さないのだと。運命づけられた愛の物語に感化され、教育された果ての実人生の結末を想像してみる。

・吉峰むぎゆ（群馬県）

秋の灯のみな飴色で怒られる

砂糖を煮詰めたような、甘さにむせそうな、時間がスローモーションに留まるような秋の茜色の灯。懐かしさに身動きできないまま追い詰められてしまう。